

昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成17年5月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 沖 第36巻第6号

俳句雑誌「おき」

6月号



沖
発行所

花いづこ

林 翔

林家のピアノ

秒速か否分速か散る桜
象が耳あげ風車廻りけり

児は鞠か鞠はこどもか春の園

断崖へ高舞ふ蝶よ花いづこ

六十年も前のことだが、妹靖子はせつかく東京音楽学校（現、芸大音楽学部）を卒業したのに、ピアノを空襲で失い、疎開先の長野県では、近くの小学校のピアノを借りて練習していた。その学校で音楽を担当していたのが向山みよ子。その縁で私とみよ子は見合いをし、結婚した。東京の家は空襲で焼かれてしまったから、私と妻は市川市八幡で六畳ふた間の間借り暮らし。妻も市川市の小学校に勤めて、学校のピアノを使うしかなかった。

しかし共働きのお陰で何とか貯金を殖やし、市川市東菅野に土地を借りて家を建てることも出来た。

私の第一句集『和紙』の第五章は昭和31年の作品だが、「妻が宿願のピアノを購ひ得て」の前書きで、

ピアノ昇き入る庭に夏蝶の祝福図
漆黒のピアノ据ゑたる大暑かも

黎明に競ふ白木蓮白椿

降る雨の受け皿あはれ紫木蓮

空恋ふる若さありけり藤花芽

耳の中のみに笛鳴る春の闇

囁りと聴けば聞かれて少女の声

しやぼん玉屋根かすめ去る遠き日も

ピアノ涼しうるみて映る室のもの
ピアノ離れず汗の子は触れ母は拭き
鳴り出すピアノ忽ち蝉の樹は遠し
晩涼や鬱然と鳴る低音部

の群作があり、『和紙』には他にも
鏘然と四日のピアノ目覚めたり

等、ピアノの句が4句ある。

しかし妻は、定年退職後しばらくは音楽関係の趣味を持ったものの、やがて海外旅行、ホームステイに興味を変え、専ら英会話の勉強に熱中して、ピアノは飾り物になってしまった。そして娘吉川朝子（バイオリニスト）がアップライトピアノをグランドピアノに換えたいと言うので、娘に譲ってしまったのである。

林
翔



檀 林

能村
研三

きつかけは旅

火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ
春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

冷酒や江戸の古地図の川の幅

繁忙といふも肥りぬ青あらし

更衣回転扉に軽く入る

麦秋の目を見て固き握手かな

『枯野の沖』の代表句と言えば、この二句がすぐに出てくるが、共に『枯野の沖』の句風の特徴と言われ、句材を心に濃く投影させた心象俳句である。制作年代は「枯野の沖」の句が昭和三十一年で、ルポルタージュ的な俳句を作った「合掌部落」の時代にほど近く、「春ひとり」の句は昭和四十二年で「枯野の沖」より十一年、句集では後半の部分に位置する。「枯野の沖」の句が、自らが言う「冬の時代」のトンネルの入口だとすれば「春ひとり」の句が出口であったかも知れない。しかし、登四郎は「冬が去って春がやってきた訳でなく、私は荒涼たる枯野の旅をつづけている」と言っている。

登四郎は第一句集『咀嚼音』、第二句集『合掌部落』そしてこの『枯野の沖』と、加齢と共にその時々々の自らの作風に対して深い反省と沈黙と後悔があった。評価を受けても、自らの俳句に立ち向かう姿勢を厳しく位置つけた。

「枯野の沖」の句を発表した昭和

ギヤラリーーに玻璃全景の新樹光

八日市場飯高檀林

青嵐や檜皮の屋根の学問所

檀林のころざしてふ夏大樹

茅花流し檀林守は知を尽す

着陸の尾翼が捉ふ薄暑光

古民家を封じるための木下闇

三十一年頃は、『合掌部落』で現代俳句協会賞を受賞した直後で、俳句を総合誌に発表する機会も多くあったが、その批評も厳しかったようだ。そして大きなスランプに陥り、総合誌で二、三回叩かれ、次は無視をされてお呼びがかからなくなった。しかし、この間虚しい気分を払いながら俳句を続けたが、それを克服するために幾度か大きな旅に出かけた。私は、登四郎にとつて長い長いトンネルを抜けるきつかけは、やはり旅にあったように思う。

納戸神へどごきぶりの疾走す

(長崎)

火の国の火の山の今炎天時

(阿蘇)

桜島父とし仰ぎ鳥賊を干す

(鹿児島)

昭和三十九年夏休みを利用して一人で九州に三週間の長旅をし、多くの雑誌に作品を発表した。この旅で鹿児島に寄ったことがきっかけで、福永耕二が上京することになる。

能村研三

蒼茫集



涙腺 藤原照子

あらためて師恩除幕の碑のうらら
死は確と老いはそれぞれ青き踏む
花見船上り下りの灯を交す
君在らばけふ金婚の花月夜
花筏の序列乱るる權さばき
涙腺のいつより涸れし夕ざくら

花吹雪 松本圭司

散る花を追ひゆく花の早さかな
天に父母あり花吹雪天に舞ふ
花吹雪髪濡るるほど浴びにけり
散る花を風嫋々と惜しみをり
花冷の手を取り温み伝へけり
ときをりは月に吹かるる花筏

空の贈物 望月晴美

花ふぶき真青な空の贈物
瑞兆よさくら月夜にさう思ふ
全貌をみたたくて登る花の山
なんとなく故郷思ふさくらかな
逝きて母天の座を得し春の星

学園句碑

朝夕に拝せる近さ句碑あたたか

づきんづきん 北川英子

いつの日か二人はひとり貝合せ
白魚売る折へぎの小舟に笹敷いて
夜気どこかづきんづきんと挿木あと
一人静こんなに群生していいの
人待つや藤浪に髪濡るるまで
句碑除幕桜明日へとひかり溜め

潮鳴集

漆黒の枝

内山照久

慈雨ならむ泰然として山笑ふ
春霞目覚めし山の吐息とも
初蝶や光と風に揉まれつつ
縄文の春の闇見し土偶の眼
漆黒の枝の曲線花を噴く

からりころりろ

林 玲子

句碑開眼花のつぼみの沸点に
蛇出でて聳ゆる句碑を迂回せり
はなびらのやうな嬰の唇仏生会
手櫛もて花にまみゆる身繕ひ
月差してからりころりろ春落葉

春 光

尾高せつ子

春光の溢れ溢るる句碑開き
春日をふはりまとへり除幕句碑

遠目にも空と睦みて花辛夷
菖蒲の芽こそりて背伸びしてをりぬ
嫁せし子のピアノくもらす春の塵

倒 木 高橋 ちよ

倒木の芽吹きを滝の潤せる
花馬酔木山なみ雨後のしづけさに
鶏の胸張り歩む彼岸西風
山峡の闇動きけり辛夷咲く
末の子も還暦春の花籠を

龍 天 に 横山 淑子

龍天に三師の句碑の先尖る
日矢さして今を生きよとさくら飛ぶ
絶筆のかすれ文字読む花ぐもり
哲学書紐で束ねる万愚節
古書店の奥のくらがり飛ぶさくら

沖作品



能村研三選

老幹をいたはるやうに梅枝垂る

東京

高木 嘉久

卒業歌樹々も直立してゐたり

葱坊主のひそひそ話村は市に

春夕焼ひと日離れぬ曲ありて

風光る児の靴干さる四つ目垣

銀の笛欲し全山を芽吹かせむ

陽炎の入り口ペダル強く踏み

朧夜の泡吹きて飲むカプチーノ

制服の少し大きめ風光る

涅槃像かた耳埋む肘枕

啓蟄や蜂蜜の壘逆さ立て

朝寢覚む脛骨のなき魚のごと

枕辺にさくら貝置く海を置く

花種を蒔く十をかけ声をかけ

春泥の背まで付点音符かな

野火奔り風の音域拡げをり

市川市

栗原 公子

東京

工藤 進

中尾 公彦

愁の歩花菜の風に掬はるる

玻璃窓にシンメトリーの春うれひ

松の芯波音に触れ威を正す

桜の夜頸静脈の醒めをらむ

恋猫を写楽の眼もて叱りけり

もう何も見えぬ暗さを雪解川

納税期鉄板踏めばはね上り

富士を見るための屋上新社員

落第子空瓶ほうと吹きにけり

雛飾る母との距離を近うして

赤松に微熱ありけり木の芽山

佐保姫の台めきたる風の間

花酔の荷風往き来の小橋かな

グランドの句碑に雄ごころ花万葉

白木蓮空に序列の生まれけり

ワイシャツのひやりと朝の桜かな

市川市

岡本 崇

千葉

林 昭太郎

坂 ようこ

落花して水は留まること覚ゆ
石たるを忘るるビルや花の雲
東風吹くや腕に羽根の生えさうな
てのひらになきくづれたりはるのゆき
初蝶を見送り打者の構へたる
跡取りのなくて荒れ田の田螺かな

東京 石川 笙児

春泥を血気の頃は踏んだ筈
利休忌や極めし人のみな瘦せて
春潮を呑む海峡の大きき口
さくら貝五枚拾ひて花にする

齋藤 實

木蓮の咲くを待つ空ありにけり
ピアノデュオ姉妹息合ふ牡丹の芽
花に触れ先師まみゆる霊地かな
ぜんまいの瞑想中を摘みにけり
駄菓子屋横丁黒蜜にほふ遅日かな
海光にふくらみ午後の椿山

奈良 南 敦子

交はし合ふ船笛韻きさくら東風
花吹雪くかに「切麻散米」句碑ひらく
父の座のけふは春鮒釣といふ
風に繰らるる三月の時刻表
桜鯛魚拓に紅の染むごとし
鳥交る「地獄の門」をこぼれ落ち
かまくらやしんしんつむしるきやみ
わらべうたどこかかなしく鳥帰る
受験子や今年こそはと倒立す

千葉 松岡 三夫

埼玉 服部 早苗

千葉 大沢美智子

春宵や消ゆる磴音聴きてをり
春星のピチカートもて点さるる
前衛のオブジェも置かれ春の寺
ちよつとだけ吹かせてもらふしやぼん玉
潮騒やぐんぐん伸びる松の芯
鳥雲に鞭を掲げて牧童は
鶏鳴の早や高まりぬ梅の香も
海老天もからりと揚り山笑ふ
名も知らぬ山から笑ふかも知れず
カステラの弾力山の目覚めかな

神奈川 大森 春子

岩手 吉川 隆史

千葉 伊藤 小雪

新人賞予選句（六月）

卒業歌樹々も直立してゐたり
銀の笛欲し全山を芽吹かせむ
枕辺にさくら貝置く海を置く
野火奔り風の音域拡げをり
富士を見るための屋上新社員
佐保姫の台めきたる風の湖
ワイシャツのひやりと朝の桜かな
初蝶を見送り打者の構へたる
さくら貝五枚拾ひて花にする
ぜんまいの瞑想中を摘みにけり

高木 嘉久
栗原 公子
工藤 進
中尾 公彦
坂 ようこ
岡本 崇
林 昭太郎
石川 笙児
齊藤 實
南 敦子

沖作品 選後句評

*
能村研三

卒業歌樹々も直立してゐたり 高木 嘉久

高木嘉久さんは以前にも述べたことがあるが、類想類句のな
い、自分で納得する句を作られる方だ。ある意味では頑固もの
と思われるぐらい自分のオリジナルの句を作るので、成功すれ
ばとてもおもしろい句になるが失敗もしばしばで、その失敗に
についても余り恐れることなくのびのびと挑戦しているようなと
ころもある。「卒業歌」の句は、高木さんにしてはややオーソドッ
クスな句かも知れないが、卒業式の当日会場の体育館から外を
見やると、まだ青々とした葉をつけていない樹々が真っ直ぐ青
空に向かっていた。学校には様々な思い出もあり感慨も一入で
あるが、学校を卒業して社会に羽ばたく生徒たちに、あの樹々
のように真っ直ぐに直立であってほしいと思うのは全ての大人
の願いでもある。「葱坊主のひそひそ話村は市に」の句、三月
の年度末までに加速した全国の町村合併もここに来てやや落ち

着きを見せたが、本来であつたら市にはならないような町や村
がこぞって市になった。この句もそんな政策をやや揶揄する気
持を表した。

銀の笛欲し全山を芽吹かせむ 栗原 公子

冬の間裸木であつた全ての落葉樹は、早春になると何か申し
合わせたように一齐に芽を吹き出す。自然の摂理とても言うの
か、都会の街路樹などでもその美しさをみる事が出来るが、
人里離れた奥深い山であれば、その美しさはすばらしい。萌え
出た一つ一つの木の芽は春の光を浴びて銀色に光っているもの
もある。自然の力の偉大さに驚きを感じた作者は、この芽吹き
のしかけも何か神様の仕業のようにも思えた。神様が春の訪れ
と共に、銀の笛を吹きならしたのかも知れない。「陽炎の入り
口ペダル強く踏み」の句、陽炎の向こうのものがゆらゆら揺れ
て見える現象はつかみどころがない。自転車ペダルを強く踏
むという行動によって心理的なものを描いた。

枕辺にさくら貝置く海を置く 工藤 進

ロマンチックで詩的構成に優れた句に思えた。「置く」置く」
とリフレインの手法を用いて成功した。その「置く」対象とし
たものが「さくら貝」という極く小さなものから「海」という
とても大きく大きなものに発展させたのがよい。リフレインの
手法もその対象がこれほど大きくなればおもしろく描ける。「啓
蟄や蜂蜜の壘逆さ立て」の句、啓蟄になると人間の些細な行動
も活発になる。それとは対象的に中々出の悪い蜂蜜の壘である
が故にその動きもゆったりとしているところをとらえた。

(以下略)